

城下町長府の歴史的遺産とその活用

土屋敏夫・外柵保大介・吉武由彩

I. はじめに

本稿は、城下町長府に散在する歴史的遺産を整理し同地域の地域資源としてどのような活用が考えられるかという点について調査・検討することを目的とした研究の成果をまとめたものである。

「長府」という地名は、646（大化2）年に、長門の国府が置かれたことから由来しているといわれている。長府の歴史は古く、古代史から近代・現代に至る多くの歴史的遺産が存在している。下関という地方都市にあり、さらに郊外地域であるという立地に関わらず、このような長い歴史を有する地域は全国的にみても稀少であるといえる。

本研究は、地域資源の一つである歴史的遺産をテーマにして、それらと城下町長府を舞台に展開された史実との関連を明らかにし整理することで、地域資源の有効活用を目指すことを目的に実施した。また、本研究を通じて、本学学生に対する教育面での活用へとつなげることも目標としている。本学の学生には、下関出身者ばかりでなく、下関市を除く中国・四国地方の出身者、九州地方出身者なども多く、もともとは下関や長府のことをあまり知らない学生も多い。そこで、収集した情報について、授業等を活用し学生へ提供することも目標としている。

本研究では、具体的には、長府地区の歴史に関する文献調査および関係者へのヒヤリング調査を実施し、古代から現代に至る歴史的遺産の掘り起こしをおこなった。また、これら歴史的遺産を整理したマップを作成することで、地域資源活用のあり方を提示することを試みた。

II. 長府地区の人口推移と産業発展

本研究の対象地域である城下町長府は、下関市長府地区¹⁾の中核をなす地域である。まず、本節では長府地区の人口推移や産業発展について述べる。

1. 長府地区の人口推移

行政区画としての長府は、1889（明治22）年の町村制施行により、豊浦村、豊浦町、高畑村、前田村が合併して豊浦郡長府村が発足したものが起源である。その後、1911（明治44）年に、長府村が町制施行して長府町となり、1937（昭和12）年に、長府町が下関市に編入して現在に至っている。

1920（大正9）年以降の長府地区の人口推移を表1に示した。長府地区の商工業の発展や、住宅街の拡大に伴って、人口は着実に増加してきた。2010（平成22）年現在の長府地区の人口は約3万人、世帯数は約1万戸である。

表1 長府地区の人口動向

年次	世帯数	男	女	計
1920 (大正9)	2,219	4,755	4,878	9,633
1935 (昭和10)	2,561	5,373	6,115	11,488
1950 (昭和25)	5,109	10,510	11,072	21,582
1965 (昭和40)	6,753	12,111	13,375	25,486
1980 (昭和55)	9,607	14,266	15,913	30,179
1995 (平成7)	11,534	14,900	17,129	32,029
2010 (平成22)	12,050	13,434	15,723	29,157

出所：下関市総務部庶務課統計係『統計概要下関』昭和36年版、
下関市ウェブサイト『統計しものせき』より作成

2. 長府地区の産業発展

(1) 長府地区の工業発展

長府地区の工業地帯は臨海部に広がっているが、このあたりは埋立地であり、1924（大正13）年から1931（昭和6）年まで長府海岸埋立工事が行われた（木村2013）。埋立工事にともない、1929（昭和4）年に長府野球場開業、1932（昭和7）年に長府楽園地が開業し、レジャー施設が多く存在する地区となった。その後、野球場および楽園地は1938（昭和13）年に閉鎖し、この跡地に、1939（昭和14）年に軍の要請により、軍需産業強化のため、鈴木商店系列の神戸製鋼所長府工場が開業する。この工場では航空機用材料が生産されていたが、終戦後の1946（昭和21）年には民需生産に変わり、アルミニウム合金や銅製品などを生産するようになった（下関市史編修委員会1989）。その後、臨海部の埋立地は拡充され、工場誘致を行った結果、長府臨海地区には、1954（昭和29）年に長府製作所（木村2013）、1967（昭和42）年に中国電力長府発電所、1970（昭和45）年にブリヂストンタイヤ下関工場などの工場が次々に立地していった（青野・尾留川1978）。現在では、長府臨海地区は、彦島地区や大和町・東大和町地区などと並んで、下関市における工業集積地区の一つとなっている。

(2) 長府地区の商業発展

長府地区には古くから商業集積が存在し、1890（明治23）年当時、この地区には呉服反物3軒、清酒等醸造2軒、小間物1軒、薬種1軒などが存在していた（木村2013）。その後、1912（大正元）年には、日用品・雑貨商12軒、呉服商4軒、醤油・酒醸造2軒、料理2軒、銀行2軒などとなり、徐々に商店の数は増加し、取り扱う商品も多岐にわたるようになったことがわかる。また、1930（昭和5）年には、長府商店街が、金屋町、中ノ町、土居ノ内、宮ノ前、中浜町、南ノ町にすでに展開していたが、この頃の商店街は日用雑貨品が主で、醤油・酒醸造や問屋も何軒かあったという。さらに、1940（昭和15）年には、老舗の日用雑貨品、醤油・酒醸造などのほかに、新興の呉服店や、学生服を販売する洋品店も現れるようになった。その後、1947（昭和22）年には長府大火が起こり、商店街などがあっ

た土居ノ内町、中之町、惣社町、南浜などにおいて687棟が消失するなどの困難を経験するが、それを乗り越え、現在でも忌宮神社周辺の長府商店街では、商店が軒を連ねている(清永2005)。

近年の長府地区の商業の変化として、ロードサイド店舗の増加が指摘できる。1988(昭和63)年には、小月バイパスが開通し、慢性的な渋滞が改善された。1993(平成5)年に、小月バイパス沿いに、大規模なショッピングセンターである「ゆめタウン長府」がオープンした。その後も、長府地区にはロードサイドの量販店や飲食店などが相次いで出店している。

Ⅲ. 城下町長府の歴史とその遺産

1. 城下町長府の歴史

長府の起源は、長門の国府が置かれていたことに由来する。もともとは府中と呼ばれており、長門の府中から長府と呼ばれるようになったといわれている。

古代律令国家時代には和同開珎の鑄造所が覚苑寺境内におかれたと考えられている。

平安時代末期、1185(文治元)年、源平合戦最後の戦いとして知られている壇ノ浦の戦いでは、源氏方が長府の沖合に浮かぶ満珠島・干珠島(まんじゅしま・かんじゅしま)に拠点を構えた。

1327(嘉暦2)年、鎌倉時代には功山寺が創建された。当時は長福寺と号した。仏殿は国宝となっている。

1600(慶長5)年の関ヶ原の戦いで西軍が負けた後、毛利輝元が約120万石から約30万石に減封され周防と長門の二つの国に封じ込められた。この時の徳川幕府に対する怨恨が倒幕につながったといわれている。その際、長府藩は萩の毛利藩の支藩として約5万石の城下町となった。現在も、城下町のまちなみが残っている地区となっている。

2. 城下町長府の歴史的遺産

城下町長府にある歴史的遺産として以下のものがあげられる。本文の番号と対応するように、それぞれの歴史的遺産の位置を図1に示した。

①神戸製鋼所長府製造所

1939(昭和14)年に創業した工場で、現在も稼働している。かつて、零戦やアルミ材を製造していた。

②壇具川

仲哀天皇、神功皇后の時代に、戦勝を祈願して祭壇にあげた様々な道具をこの川に流したのが名前の由来とされている。

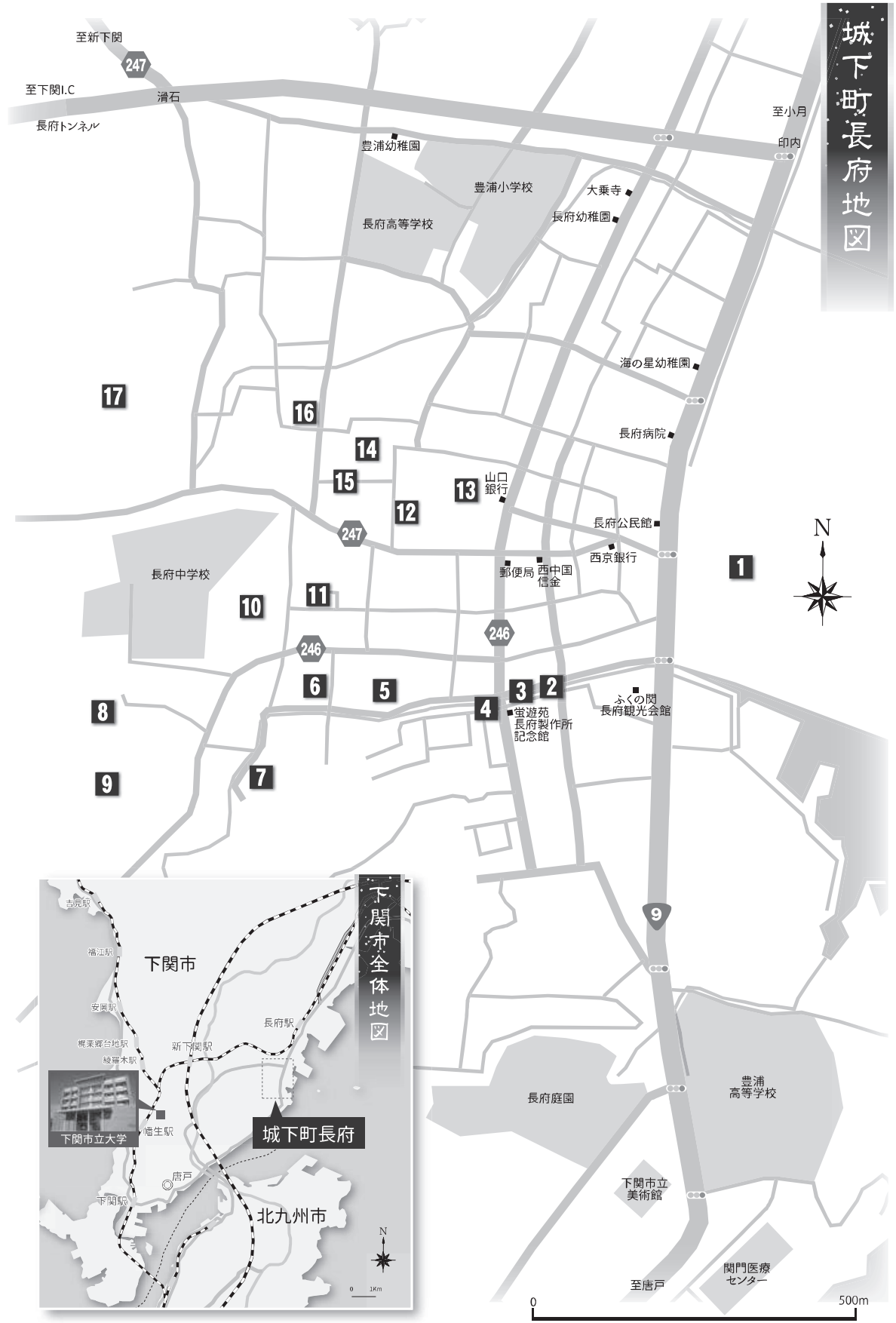


図1 城下町長府における歴史的遺産の位置

③印藤聿（いんどうのぶる）生家跡

坂本龍馬が度々訪れ、龍馬に経済的な支援をした。後に名前を豊永長吉に変えた。武士であったが経済に通じていた。銀行、塩田開発、製薬業、門司港の開発などの実績がある。

④長府藩侍屋敷長屋

家老屋敷の分家にあった長屋を移築したもの。大きさが8間×2間（1間＝182cm）で、昔の宮大工が作った建物である。門の横に建てられていたもので、両側の畳の部屋は「友待ち部屋」と呼ばれ、主人に会いに来た人たちの待合室であった。中央の土間は使用人達の仕事部屋である。建物はおそらく江戸末期のものである。1985（昭和60）年頃にコロで転がし移築した。邸内には毛利家の家系図も展示されている。

⑤御影の井戸

901（延喜元）年、菅原道真公が太宰府に流された際に忌宮神社に宿泊し、ここに在った「勸学院」の井戸に映った自分を見て自画像を書いたといわれている。

⑥桂弥一邸

桂弥一は乃木希典の友人で、乃木らとともに「集童場（しゅうどうじょう）」で学んだ。幕末から明治にかけて活躍した人物。功山寺境内にある「尊攘堂」（現在は長府博物館となっている）と「万骨塔」を建てた。現在は「祥」というカフェが営業しており、邸内に長府にゆかりのある骨董品などを展示している。

⑦笑山寺

長府毛利藩の菩提寺で、2代目毛利光広（みつひろ）、7代目毛利師就（もろなり）の墓がある。曹洞宗の寺院である。

中には「瀧川辨三（たきがわべんぞう）彰功の碑」がある。瀧川辨三は神戸でマッチを製造し財をなした。滝川高校を創設した。長府の出身であり、「集童場」で乃木希典らとともに学んだ。

⑧功山寺

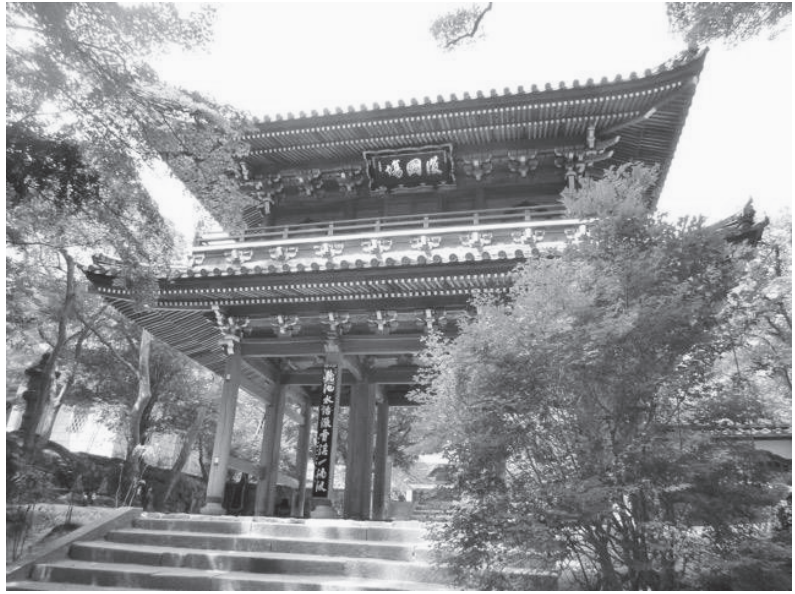
1327（嘉暦2）年に金山長福寺と号して創建された臨済宗のお寺である。ただし、国宝の仏殿はそれより早い1320（元応2）年に建立。1650（慶安3）年、長府藩主毛利秀元の没後に法名を使って功山寺に改名された。仏殿の軒下に「金山」と書かれているのが見える。

国宝の仏殿は、鎌倉の円覚寺と同じ頃建立されたもので、檜皮葺きの屋根が特徴的である。

境内には、二重櫓作りの山門のほか、「高杉晋作回天義挙像」や、日本海軍の創建に尽くした「服部潜蔵（せんぞう）の墓」などが設置されている。

総門横の石碑には、「不許葦酒入山門（葦酒（くんしゅ）山門に入るを許さず）」と刻んであり、くさいものと酒は持って入れないので注意しよう。これは禅宗のお寺にはたいてい書かれているそうである。また、総門には高杉晋作が挙兵した時につけられたとの言い伝えがある刀傷が刻まれている。

秋には紅葉の名所としても知られている。



⑨万骨塔

「一将功成って万骨枯る」という中国の故事に由来し、日本全国の明治維新に関連して命を落とした人たちの霊を供養するため、桂弥一が建てたもの。個人に由来する場所から石を持ってきて積んでいる。一部、存命中に石を積んでいた場合もあったとされている。

⑩長府毛利邸

1903（明治36）年に建てられた邸宅。1902（明治35）年に天皇陛下が訪れた際、同邸を行在所（あんざいしょ）として使用した。武家屋敷造りの母屋と白壁に囲まれた日本庭園からなる。日本庭園は、書院造り、枯山水、池泉回遊式の3種類の形態をもつ。秋の紅葉が美しい。



⑪菅家長屋門（かんけながやもん）

菅家は、毛利秀元に京都から招かれ待医兼待講職を務めた。菅家の邸宅の長屋門が残っており、菅家長屋門とよばれている。間口が約40mあり、長屋門に連なる土塀には白い漆喰が塗られていないのが特徴である。土の中に撥水性のある土や材料を練り込み、独特の色合いの赤土そのまま壁を保たせている。この赤土の色合いが長府独特の美しいまち

なみを形成している。菅家長屋門がある通りは、古江小路と呼ばれまちなみがよく整備されており、下関を代表する景観を有し多くの観光客が訪れる通りである。土堀に代表される長府の歴史的まちなみは全国的にめずらしく、2013（平成 25）年度には「都市景観大賞」で大賞（国土交通大臣賞）を受賞した。

⑫下関市立長府図書館

1909（明治 42）年に私立豊浦郡教育会付設豊浦図書館として開館し、1924（大正 13）年に当時の長府町に移管され長府町立長府図書館と改称、さらに 1937（昭和 12）年に下関市と合併して市立図書館に改称した。1967（昭和 42）年の明治 100 年記念事業の一環として、それまで書庫として使われていたレンガ造りの建物を下関市文書館として併設した。長府毛利藩関係の古文書をはじめ、乃木文庫、熊谷家文書などの貴重な歴史資料が保管されている。この付近に長門国の国府があったといわれている。

⑬忌宮神社

14 代仲哀天皇が 7 年間都をおいた「豊浦宮（とようらのみや）」を建てたのがはじまりとされている。

毎年 8 月 7 日から 1 週間行われる「数方庭祭」は、境内にある「鬼石」のまわりを女子供は切籠を捧げ、男子は幟を持ち、廻り歩きまわる日本 3 大奇祭のひとつ。大きな幟は 20m、80kg におよぶ。仲哀天皇の戦勝を記念して踊りまわったことが由来とされている。



また、仲哀天皇に渡来人が「蚕（かいこ）」を献上したという伝説から「蚕種渡来の地」の碑や、乃木希典らが学んだ集童場に由来する「集童場場長室」（移築）が境内の一角にある。

⑭乃木神社

日露戦争で活躍した乃木希典を文武両道の神として祀る。生まれは東京（江戸）だが、父の郷里である長府で 10 歳から 15 歳まで生活した。境内には乃木親子が生活した屋敷などが保存されている。

⑮横枕小路

乃木神社の南の路地は横枕小路と呼ばれ、昔ながらの土塀と樹葉のまちなみが残っており、人気の散策スポットになっている。

⑯国分寺跡

741（天平13）年、聖武天皇が全国に建立させた国分寺の一つ。礎石や瓦などが出土している。約1町（およそ100m四方）の広さがあったといわれている。1890（明治23）年に唐戸に移転した。

⑰覚苑寺

毛利家の菩提寺の一つ。1698（元禄11）年、長府毛利藩3代目藩主綱元が建てた寺で、6代目、13代目の3人の菩提寺となった。禅宗の黄檗宗のお寺である。

境内は和同開珎の鑄銭所の跡と考えられており、出土品は長府博物館に展示されている。708（和銅元）年頃から、鑄造師が駐在する官営の工房があったとされている。2010（平成22）年には、付近から大量の木簡が出土した。

また、境内には、長府出身の狩野芳崖の銅像などがある。

IV. むすびにかえて

本研究では、城下町長府における歴史的遺産の活用策についても取り組んだ。具体的には、城下町長府の歴史的遺産を整理した「城下町長府地区マップ」を3,000部作成した（図2）。

完成したマップは、本学1年生が受講する「アカデミックリテラシー」の授業において配布するなどして研究成果の活用にも努めている。本学学生には、マップを通して地域への関心を高め、マップを片手に城下町長府を歩くことを期待している。学生の主体的な地域活動へとつなげることで、地域と大学との連携をより密にすることができ、今後の地域での教育・研究活動を発展させることができると考えられる。

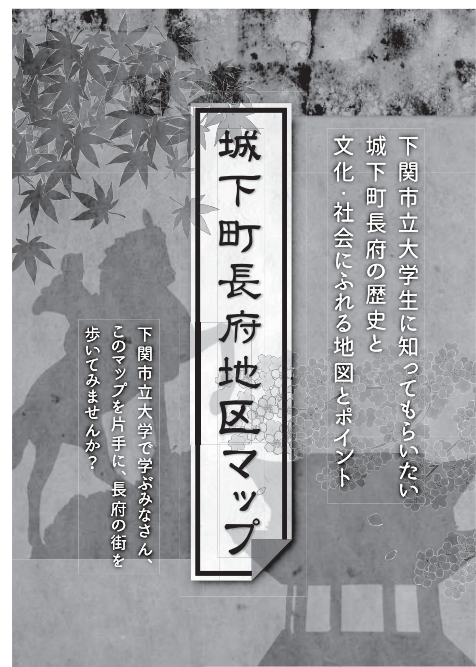


図2 「城下町長府地区マップ」表紙

謝辞

本研究を実施するにあたり、下関観光ガイドの会の井上強様にご協力いただきました。
厚く御礼申し上げます。

注

- 1) 本稿でいう「長府地区」とは、下関市役所支所設置条例における下関市役所長府支所の所管する区域のことである。

文献

- 青野壽郎・尾留川正平編（1978）『日本地誌 17 卷岡山県・広島県・山口県』二宮書店
- 木村健二（2013）「近代の下関と近郊地域の変容」平成 25 年度秋・下関市立大学市民大学
公開講座資料
- 清永唯夫監修（2005）『図説下関の歴史』
- 下関観光ウェブサイト（<http://www.city.shimonoseki.yamaguchi.jp/kanko/index.html>）
- 長府観光協会ウェブサイト（<http://www.chofukankou.com/index.html>）
- 下関市史編修委員会（1989）『下関市史・終戦－現在』
- 嘉室千加子（2011）下関文書館の紹介，公立公文書館アーカイブス，第 43 号，84 - 86 頁.